

《トルヴァルドとドルリスカ》 作品解説

水谷 彰良

初出『ロッシニアーナ』（日本ロッシニー協会紀要）第31号（2010年発行）の拙稿『ロッシニー全作品事典（20）
《トルヴァルドとドルリスカ》』。一部改訂してHPに掲載します。 （2011年12月改訂）

I-16 トルヴァルドとドルリスカ *Torvaldo e Dorliska*

劇区分 2幕のドランマ・セミセーリオ (dramma semiserio in due atti)

第1幕：全11景、第2幕：全9景、イタリア語

台本 チューザレ・ステルビーニ (Cesare Sterbini, 1783-1831)。

註：従来の文献はステルビーニの生年を1784年としたが、洗礼簿の調査により誕生日が1783年10月29日と判明¹。

原作 ジャン＝バティスト・ルーヴェ・ド・クーヴレ (Jean-Baptiste Louvet de Couvray², 1760-1797) の3巻で完結する小説『騎士フォーブラスの恋 (*Les Amours du Chevalier de Faublas*)』(ロンドン/パリ、1787、88、90年刊)の第2版『騎士フォーブラスの生涯と恋 (*Vie et Amours du Chevalier de Faublas*)』(ロンドン/パリ、1790年。13分冊)及び同小説をクロード＝フランソワ・フィレット＝ロロー (Claude-François Fillette-Loroux, ?-?) が脚色した3幕の英雄喜歌劇 (comédie héroïque) 『ロドイスカ (*Lodoïska*)』(ルイーゼ・ケルビーニ作曲。1791年7月18日パリ、フェイドー劇場 [Théâtre Feydeau] 初演)⁴

作曲年 1815年11月11日以降～12月26日

初演 1815年12月26日 (火曜日)、ローマ、ヴァッレ劇場 (Teatro Valle)

人物 ①オールドウ公爵 Duca d'Ordow⁵ (バス、G-f#[♯]) ……北欧の片田舎の領主
②ドルリスカ Dorliska (ソプラノ、a-b[♯]) ……トルヴァルドの妻
③トルヴァルド Torvaldo (テノール、c'-c[♯]) ……ドルリスカの夫
④ジョルジョ Giorgio (バス、E♭-f#[♯]) ……オールドウの城の門番
⑤カルロッタ Carlotta (ソプラノ、b-b[♯]) ……ジョルジョの妹
⑥オルモンド Ormondo (バリトン、B♭-g[♯]) ……公爵の武装兵の頭
ほかに召使、武装兵、農民、榴弾兵たち (男声合唱：テノール I・II、バス)

初演者 ①フィリッポ・ガッリ (Filippo Galli, 1784-1853)
②アデライーデ・サーラ (Adelaide Sala, c.1795-?)
③ドメーニコ・ドンゼッリ (Domenico Donzelli, 1790-1873)
④ラニエーリ・レモリーニ (Ranieri Remorini, ?-?)
⑤アニューゼ・ロワズレ (Agnese Loiselet, ?-?)
⑥クリストーフォロ・バステリアネッリ (Cristoforo Bastianelli, ?-?)

管弦楽 2フルート*/1ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット*、2ホルン、2トランペット、2トロンボーン*、ティンパニ、大太鼓、鐘、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器
* 序曲以外は1。

演奏時間 序曲：約9分、第1幕：約90分、第2幕：約60分

自筆楽譜 フランス国立図書館 (音楽院文庫。但し、N.2、4、10、13 とレチタティーヴォ・セッコはロッシニーの自筆ではない)

初版楽譜 Tito di Gio. Ricordi, Milano, 1854. (ヴォーカルスコア)

全集版 I/16 (Francesco Paolo Russo 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 2007.)

楽曲構成

序曲 (Sinfonia)：ニ長調、2/4拍子、ラルゴ～4/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ

第1幕

N.1. 導入曲〈よく言ったものさ、この世にあるものは良く似てると È un bel dir che tutto al mondo〉(公爵、ジョルジョ、オルモンド、男声合唱)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈オルモンドよ、わしの部下たちが Ormondo: la mia gente〉(公爵、ジョルジョ、オルモンド)

N.2. レチタティーヴォ〈私はどこにいるの？ 誰が助けてくれるの？ Dove son? Chi m'aita?〉とドルリスカのカ

- ヴァティーナ〈無駄だわ、誰も聞いていない *Tutto è vano; niun m'ascolta*〉(ドルリスカ)
- カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ああ、私も不幸だわ! *Ah, son pur infelice!*〉(ドルリスカ、カルロッタ、ジョルジョ)
- N.3 ドルリスカと公爵の二重唱〈彼女は!…なんということだ! *Ella!... oh ciel!...*〉(ドルリスカ、公爵)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈彼女はもはや、わしから逃げられぬ *Ella più non mi fugge*〉(公爵、ジョルジョ、オルモンド)
- N.4 レチタティーヴォ〈まったく静かだ *Tutto è silenzio*〉とトルヴァルドのカヴァティーナ〈すぐにおまえの近くで *Fra un istante a te vicino*〉(トルヴァルド)
- カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ああ、自分のはやる気持ちを抑えきれない *Ah ch'io non reggo ai moti*〉(トルヴァルド、公爵、ジョルジョ)
- N.5 三重唱〈ああ、なんという希望の光が *Ah qual raggio di speranza*〉(トルヴァルド、公爵、ジョルジョ)
- 三重唱の後のレチタティーヴォ〈私にはもうできない *Io non ne posso più*〉(オルモンド)
- N.6 オルモンドのアリア〈あの樹の上で *Sopra quell' albero*〉(オルモンド)
- N.7 フィナーレ I 〈ああ、お行きになって、奥様 *Oh via, Signora mia*〉(ドルリスカ、カルロッタ、トルヴァルド、公爵、ジョルジョ、オルモンド、合唱)

第2幕

- N.8 第2幕導入曲〈いいぞ、いいぞ、こっちへ来い *Bravi,bravi; qua venite*〉(ジョルジョ、合唱)
- 第2幕導入曲の後のレチタティーヴォ〈ちょうどいい、すでに少し話しましたが *Or: già qualche cosa*〉(トルヴァルド、ジョルジョ)
- N.9 レチタティーヴォ〈聞いてくれ、私にとって良き友よ *Odimi; ah tu di me*〉とトルヴァルドのアリア〈彼女に言ってくれ、あなただけを *Dille, che solo a lei*〉(トルヴァルド、ジョルジョ、男声合唱)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈後悔しても無駄だ *No, pentirsi non giova*〉(ドルリスカ、公爵、ジョルジョ)
- N.10 レチタティーヴォ〈もう駄目ね、わたしの災難の *Non più: di mie sventure*〉とドルリスカのアリア〈断固として、揺るがず、動かず *Ferma, costante, immobile*〉(ドルリスカ、公爵)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈愚かな女だ!…判らないとは *Insensata!...e non vede*〉(ドルリスカ、カルロッタ、公爵、ジョルジョ)
- N.11 カルロッタのアリア〈喜ばしい声が *Una voce lusinghiera*〉(カルロッタ)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈うまくやれたかどうか判らない *Non so se ho fatto bene*〉(ジョルジョ)
- N.12 公爵とジョルジョの二重唱〈ああ、できない!…むなしくそれを望むなど! *Ah non posso!... invan lo spero!*〉(公爵、ジョルジョ)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈私を逃がしたいのですね? *Dunque tu vuoi ch'io parta?*〉(ドルリスカ、トルヴァルド)
- N.13 ドルリスカとトルヴァルドの小二重唱〈この最後の別れに *Quest'ultimo addio*〉(ドルリスカ、トルヴァルド)
- 小二重唱の後のレチタティーヴォ〈お行きください、お二人とも *Ma via, Signori miei*〉(ドルリスカ、カルロッタ、トルヴァルド)
- N.14 六重唱〈邪悪な者たち!…震えるがいい!…*Alme ree!...tremate!...*〉(ドルリスカ、カルロッタ、トルヴァルド、公爵、ジョルジョ、オルモンド、男声合唱)
- 六重唱の後のレチタティーヴォ〈ああ、私たちどうなるの? *Ah di noi che sarà?...*〉(ドルリスカ、トルヴァルド、ジョルジョ、オルモンド、カルロッタ、男声合唱)
- N.15 公爵のアリア〈諦めろ!…下がれ。ああ、なんという声が周囲で轟くのだ? *Cedi!... Indietro Ah qual voce d'intorno rimbomba?*〉(トルヴァルド、公爵、男声合唱)
- アリアの後のレチタティーヴォ〈大変だ、彼を追いかけなさい *Per Bacco, seguitatelo*〉(ジョルジョ)
- N.16 第2幕フィナーレ〈慈悲深い運命のおかげで *Grazie al destin pietoso*〉(ドルリスカ、カルロッタ、トルヴァルド、ジョルジョ、男声合唱)

物語 (時と場所の指定なし)

【第1幕】

北欧の片田舎、森に臨むオールドウ公爵の城。門番ジョルジョがオールドウ公爵の乱暴さを嘆いていると、従者たちが公爵を見つけられずに戻ってくる。公爵はオルモンドと武装兵士を率い、夜陰に乗じてトルヴァルドを襲い、その妻ドルリスカを奪いに行ったのである。ほどなく戻った公爵は、兵士たちがドルリスカを取り逃がしたと知り、再び探しに行く (N.1 導入曲)。

夫とはぐれたドルリスカが森の中から現れ、見知らぬ城の門を叩いて救いを求めるが、応答がなく不安にかられる (N.2 レチタティーヴォとドルリスカのカヴァティーナ)。やがてジョルジョの妹カルロッタが来て、ドルリスカを迎え入れる。

城の一室。結婚式の帰りに森で襲われた話をドルリスカから聞いたジョルジョは、ここが彼女を襲ったオルドゥ公爵の城であると教える。驚いた彼女は立ち去ろうとするが、城に戻った公爵に見つかってしまう。公爵はドルリスカに求愛して拒絶されると、「トルヴァルドは死んだ、おまえも愛を拒めば殺す」と脅す。ドルリスカは公爵を激しく非難し、城に幽閉される (N.3 ドルリスカと公爵の二重唱)。

城の門の前にトルヴァルドが来て、ひと気のないのを確かめると、妻を見つけようと決意する (N.4 レチタティーヴォとトルヴァルドのカヴァティーナ)。彼は通りがかった農民を呼び止めて服を交換し、変装すると、ジョルジョに出くわす。ジョルジョの善良さを見抜いたトルヴァルドは、自分がドルリスカの夫であると打ち明け、ジョルジョも協力を約束する。トルヴァルドは事前に用意しておいた瀕死の騎士に託されたという偽の手紙を公爵に見せ、トルヴァルドが死んだと信じさせる。公爵はこれでドルリスカが自分のものになると喜び、トルヴァルドも妻との再会がかなうとひそかに喜ぶ (N.5 三重唱)。入れ替わりにオルモンドが現れ、トルヴァルドの遺体を探したが見つからない、とこぼす (N.6 オルモンドのアリア)。

城の一室。カルロッタはドルリスカを慰めるが、夫が死んだと思った彼女は絶望してその場に崩れ落ちる。トルヴァルド、公爵、ジョルジョが来てドルリスカを見つける。目を醒ました彼女はトルヴァルドの偽手紙を読み、ショックで気を失う。変装したトルヴァルドの呼び掛けで意識が戻ったドルリスカは夫の姿を認め、名前を口にしかける。トルヴァルドは自分の正体を明かし、剣を手に公爵と睨み合うが、武装兵士に捕らわれてしまう (N.7 フィナーレ I)。

【第2幕】

城の地下。ジョルジョが召使たちを先導して降りてきて、トルヴァルドを解放するつもりだと話す (N.8 導入曲)。夕暮れになったら城の門を開けて武装した村人を入れて救出すると教えられたトルヴァルドは、妻に自分が彼女を愛していると伝えてくれとジョルジョに懇願する (N.9 レチタティーヴォとトルヴァルドのアリア)。

城の一室。公爵はジョルジョに命じてドルリスカを連れて来させ、自分と結婚すれば夫の命を助けるともちかけるが、ドルリスカは毅然としてこれを拒否し、愛しい夫のために死ねるなら本望と答える (N.10 レチタティーヴォとドルリスカのアリア)。怒った公爵はオルモンドを呼ぶよう命じ、「地下牢の鍵を失くすな」とジョルジョに厳命して去る。だが、ドルリスカから夫と会うため地下牢の鍵を求められたジョルジョは、同情して渡してしまう。カルロッタはドルリスカを励まし、すぐ戻ると兄に約束してドルリスカと共に地下牢へ行く (N.11 カルロッタのアリア)。公爵が戻り、トルヴァルドを殺すため地下牢の鍵を求めると、ジョルジョは誤魔化しきれず、妹が持つていったと言う。怒った公爵はジョルジョを急かして地下牢に向かう (N.12 公爵とジョルジョの二重唱)。

地下牢で再会したトルヴァルドとドルリスカは、死の不安に怯え、苦悩する。そこにカルロッタが来て逃げるよう促すが (N.13 ドルリスカとトルヴァルドの小二重唱)、ジョルジョを連れた公爵が来て「お前たちは全員敵だ」と威嚇する。一同恐怖に震え、公爵がドルリスカに来よう命じていると、鐘の音が聞こえる。兵士を連れたオルモンドが現れ、城が村人に包囲されたと報告する (N.14 六重唱)。「圧制者に死を」と叫ぶ農民と兵士たちに圧倒された公爵は、観念して自分の運命を嘆き、連行されていく (N.15 公爵のアリア)。ドルリスカとトルヴァルドは救出された喜びにひたり、ジョルジョとカルロッタも満足して人々と喜びを分かち合う (N.16 フィナーレ II)。

解説

【作品の成立】

《トルヴァルドとドルリスカ》はロッシーニがローマで発表した最初のオペラとなる。それ以前にロッシーニは《デメトリオとポリービオ》の習作を含めて 15 のオペラを書いていたが、初演地はヴェネツィア、ボローニャ、フェッラーラ、ミラーノの 4 都市であった (但し、《デメトリオとポリービオ》はロッシーニが関知せずに 1812 年にローマで初演)。だが、本作に先立つ 3 作——《パルミーラのアウレリアーノ》(1813 年)、《イタリアのトルコ人》(1814 年)、《シジスモンド》(1814 年) は、十分な成功を収めることが出来なかった。

当初その活動が北部イタリアに限定されたロッシーニがナポリ王立劇場の音楽監督兼作曲家として南部に拠点を移したのは 1815 年、23 歳のとき。同年 10 月《イギリス女王エリザベッタ》でナポリ・デビューを果たし、続いてローマの民間劇場のために作曲したのがこの《トルヴァルドとドルリスカ》である。

ローマの劇場 (もしくは興行師) との接触は、《パルミーラのアウレリアーノ》(1813 年 12 月 26 日) の初演前から始まっていた。ロッシーニは 1813 年 11 月 7 日付の母アンナに宛てた手紙の中で、ローマと 3 度目の商談をした旨を記しているのだ⁶。興味深いのは、同じ手紙に滞在中のミラーノを離れたら「謝肉祭シーズンの 2 番目のオペラを書くためにジェノヴァに行く」とあることで、ジェノヴァのサンタゴスティーノ劇場との間に新作を書く話

が進んでいたことが判る。けれどもジェノヴァの仕事は実現せず、ロッシーニは翌1814年8月14日にミラーノのスカラ座で《イタリアのトルコ人》を初演、続いて同年12月26日にヴェネツィアのフェニーチェ劇場で《シジスモンド》を初演するのであるが、それに先立ち、12月2日付の母宛の手紙に「今度の謝肉祭のためにローマと良い新契約を結んだ」と記している⁷。これは明らかに1年後の謝肉祭シーズン開幕オペラとしてヴァッレ劇場で初演される新作（《トルヴァルドとドルリスカ》として成立）を意味し、翌1815年5月16日にはボローニャからミラーノの台本作家アンジェロ・アネッリ（Angelo Anelli, 1761-1820. 《アルジェのイタリア女》の台本作家）に宛て、次の謝肉祭にローマで初演するオペラ用の「奇想天外なブッフア台本（Libro buffo pieno di capriccio）」を求めている⁸。だが、アネッリは新作ではなくすでに他作曲家の使用した台本を送ったらしく、ロッシーニは6月8日付の手紙で落胆した旨を告げ⁹、これをもって両者の協力関係は終わりを告げた。

当時ローマには、アルジェンティーナ劇場（1732年開場）、ヴァッレ劇場（1726年建築）、アポッロ劇場（1781年の火災で焼失し、1789～95年に再建）の三つの民間劇場があった。それらの劇場オーケストラは通例アマチュア音楽家で構成され、メンバーも上演ごとに集められた¹⁰。ヴァッレ劇場は1726年に建てられた木造劇場であるが、1812年5月18日に巡業歌劇団がロッシーニに無断で《デメトリオとポリービオ》を初演し、これがローマでロッシーニの名を広めるきっかけとなっていた。その後ローマでは1814年に《幸せな間違い》と《アルジェのイタリア女》がヴァッレ劇場、《タンクレーディ》がアポッロ劇場で上演され、1815年1月にはアルジェンティーナ劇場でも《タンクレーディ》が上演されている。

ロッシーニは1815年10月4日にナポリのサン・カルロ劇場で《イギリス女王エリザベッタ》を初演、続いて同地のフィオレンティーニ劇場での《幸せな間違い》上演を経て、10月28日に同劇場で上演する《アルジェのイタリア女》のためにイザベッラ役の差し替えレチタティーヴォとアリア（N.15a. *Sullo stil de' viaggiatori*）を作曲した。これはイザベッラの Rondò（祖国のことを考えよ（*Pensa alla patria*））が検閲に抵触したためと思われる（他の変更については全集版《アルジェのイタリア女》序文を参照されたい）。ロッシーニはその翌日（10月29日）ナポリを離れ（10月27日付の母宛の手紙に、明後日にローマへ向けて発つと書かれている）¹¹、10月末もしくは11月初頭にローマ入りした。11月4日に母に宛てた手紙でローマ到着を報告するとともに、「すぐに台本を手にするでしょう」と記しており、この時点で《トルヴァルドとドルリスカ》の完成台本を得ていないことが判る¹²。

ロッシーニが比較的早くローマ入りしたのは、11月7日にヴァッレ劇場で予定された《イタリアのトルコ人》の上演に際して第三者の作曲したナンバーをカットしてフィオリツァのカヴァティーナを新曲と差し替えるなどの改作をする目的もあった¹³。この上演は大成功を収め、ロッシーニは母に宛て、3回カーテンコールされて観客の熱狂的な拍手喝采を受けた、と報告している（11月11日付）¹⁴。その頃にはアルジェンティーナ劇場の支配人フランチェスコ・スフォルツァ・チェザリーニ（Francesco Sforza Cesarini, 1772-1816）と接触し、《アルジェのイタリア女》を上演する契約も結んだようだ（同劇場での初日は1816年1月13日）。

台本作家に指定されたチェザレ・ステルビーニ（Cesare Sterbini, 1783-1831）は次作《セビーリヤの理髪師》も手がけるローマの詩人であるが、初期活動は不明で、1812年7月4日にヴァッレ劇場で初演されたカンタータ《パオロとヴィルジーニア（*Paolo e Virginia*）》（ヴィンチェンツォ・ミリオルッチ作曲）のテキストが確認できる最初の作品となる。《トルヴァルドとドルリスカ》は彼の最初のオペラ台本で、原作をフランスの作家ジャン＝パティスト・ルーヴェ・ド・クーヴレ（Jean-Baptiste Louvet de Couvray, 1760-1797）の3巻で完結する小説『騎士フォーブラスの恋（*Les Amours du Chevalier de Faublas*）』（ロンドン／パリ、1787、88、90年刊）の第2版『騎士フォーブラスの生涯と恋（*Vie et Amours du Chevalier de Faublas*）』（ロンドン／パリ、1790年。13分冊）及び、同小説をクロード＝フランソワ・フィレット＝ロロー（Claude-François Fillette-Loroux, ?-?）が脚色した3幕の英雄喜歌劇『ロドイスカ（*Lodoïska*）』（ケルビーニの作曲で1791年7月18日パリ、フェイドー劇場初演）に求めた。しかし、ステルビーニは素材を自由に脚色しており、いわゆる翻案とは手法を異にする。

初演歌手のうちガッリ、レモリーニ、ドンゼッリについては同年5月の前記アネッリ宛の書簡に名前が挙がっており、この段階で謝肉祭のヴァッレ劇場への出演が決まっていた（女性歌手については「一人の良いプリマ・ドンナを確実に登場させられるだろう」と言明されている）。オールドウ公爵を初演するフィリッポ・ガッリ（Filippo Galli, 1784-1853）は、これに先立ち《アルジェのイタリア女》ムスタファ、《イタリアのトルコ人》セリムなど、ロッシーニ4役を創唱した名バスの歌手である。トルヴァルド役を務めたドメーニコ・ドンゼッリ（Domenico Donzelli, 1790-1873）は当時25歳と若かったが、後に《ランスへの旅》騎士ベルフィオーレやベッリーニ《ノルマ》のポッリオーネを創唱するなど、資質に恵まれたテノールであった。

ロッシーニは12月2日の母宛の手紙の書き出しに、「ぼくは馬車馬のように働いています（*Io stò lavorando come una bestia*）」¹⁵と記し、作曲に忙殺されていることが伺える。だが、これ以後12月26日に初演を迎えるまで《トルヴァルドとドルリスカ》の作曲経過を詳らかにするドキュメントは現存せず、母に宛てた手紙も初演翌日まで書かれなかった。

【特色】

歴史的題材の《イギリス女王エリザベッタ》と喜歌劇《セビリャの理髪師》の間に作られた《トルヴァルドとドルリスカ》は、ジャンルのにもオペラ・セミセーリアに属している。このジャンルは18世紀後半に感傷的メロドラマやお涙頂戴劇としてフランスで誕生し、イタリア・オペラではパイジェットの《ニーナ、または恋に狂った娘 (*Nina, o sia La pazza per amore*)》(1789年)が広く流布したが、フランス革命期に不当逮捕や公開処刑が日常化すると、窮地からの脱出や救出を盛り込む救出劇(ピエス・ア・ソヴァージュ)に関心が移った。その出発点が、ベートーヴェン《フィデーリオ》の原点に当たるピエール・ガヴォー作曲のオペラ・コミック《レオノール、または夫婦の愛》(1798年パリ初演)である。ロッシーニもこのジャンルで五つのオペラを作曲し、《トルヴァルドとドルリスカ》は《幸せな間違い》(1812年)に続いて2作目となる¹⁶。

明らかな救出劇である本作は、シリアスな物語に喜劇的要素を織り交ぜている。オペラ・セミセーリアのジャンルは通例オペラ・セーリアの中に感傷的な要素や悲劇的な感情表現を込めたものとされるが、音楽的にはシリアスな音楽とコミカルな音楽を混在させたジャンルでもあり、主要人物の役柄においても二つの側面(高貴な性格と庶民的な性格)の共存がみられる。主役のトルヴァルドとドルリスカが一貫して高貴で真面目な人物であるのに対し、滑稽役の門番ジョルジョは真摯な性格を併せ持っている。オールドウ伯爵は典型的な悪役ながらどこか憎めない人物で、第2幕ジョルジョとの二重唱では喜劇的なタイプの早口を駆使してこのジャンル3作目《泥棒かささぎ》(1817年)の代官を想起させる。

独立した序曲(シンフォニー)も含め、レチタティーヴォ・セッコを除くナンバーが書き下ろしである点にも、ロッシーニの意欲的な姿勢が見て取れる。旧作からの転用は限定的で、第1幕トルヴァルドのカヴァティーナ(N.4)のカバレッタ〈*Cara consolati*〉が《タンクレーディ》第1幕タンクレーディの差し替えカヴァティーナ(N.3a)のカバレッタ〈*Voce che tenera*〉に起源を持ち¹⁷、第2幕導入曲のジョルジョのソロの音楽に《シジスモンド》(1814年)序曲の第二主題が使われ、フィナーレ末尾のアンサンブルが《絹のはしご》(1812年)の四重唱カノン(《試金石》のフィナーレにも使われた音楽)、第2幕ドルリスカとトルヴァルドの小二重唱が前年作曲したピアノ伴奏デュエット〈*Amore mi assisti*〉の改作¹⁸と指摘されるだけである。前記のように第2幕は真面目すぎて当時の観客の不評をかかってしまったが、現代の聴衆であればむしろシリアスな側面に高い評価を下すに違いない。終盤の公爵のアリア(N.15)——後に《オテッロ》の二重唱に改作——が、ヴェルディ《リゴレット》第2幕ジルダとリゴレットの二重唱のカバレッタ〈そうだ、復讐だ(*Si vendetta*)〉の原型であることも記しておこう。

【上演史】

優秀なメンバーを揃えたにもかかわらず、1815年12月26日にヴァッレ劇場で行われた初演は成功しなかった。翌1816年1月18日付の『ノティーツイエ・デル・ジョルノ (*Notizie del giorno*)』は、「ドラマの主題がとても陰気で、ホメロスを眠りから目覚めさせるほどには面白くない」とし、「《タンクレーディ》や《パンパルーコ (*Pampalucò*) [該当作不明]」や《試金石》等々の有名な作曲者であると私たちにすぐ認めさせたのは、導入曲と1曲の三重唱の初めの部分だけ」とし、さらに「先週土曜日の晩に、同じマエストロの《幸せな間違い》と題されたファルサに差し替えられた」と書かれている¹⁹。これは評判の悪い第2幕の代わりに《幸せな間違い》を第2部として上演したことを意味する。ロッシーニ自身も、第2幕の不評を1月17日付の母宛の手紙で認めていた——「新作オペラの第1幕はますます[観客を]喜ばせていますが、第2幕は真面目すぎて[評価が]低いままです」²⁰。

とはいえ、4人の主要歌手のうちガッリ、レモリーニ、ドンゼッリの3人はローマで人気があり、批評でも絶賛されている。『ビブリオテカ・テアトラレ (*Biblioteca teatrale*)』第3巻は、「ロッシーニは導入曲で成功したが、後はごたごたしすぎている」「もしガッリがいなかったら、《ドルリスカ》はたった一晩も耐えられなかった」と辛辣に評している²¹。

初演の評価はこのようなものであったが、ロッシーニの新作とあってイタリア各地の劇場で再演をみた(→上演史)。その際当時の常として、第三者によるカットやアリアの差し替えも行われたが、ロッシーニの関与した再演は1818年秋期におけるナポリのヌオーヴォ劇場(主な変更はN.6 オルモンドのアリアとN.15 公爵のアリアをカットして上演)と、1820年のサン・カルロ劇場(主な変更はN.13 小二重唱の後半部へのテキストと音楽の追加)である²²。変更された二重唱の自筆楽譜は現存しないが、ナポリのジラルド社からヴォーカルスコアが出版され、全集版に補遺IIとして掲載されている。再演の機会が乏しいことから、ロッシーニは後日、音楽素材を《新聞》《オテッロ》《ラ・チェネレントラ》に再利用している。



トルヴァルドのレチタティーヴォとカヴァティーナ(N.4)の印刷楽譜
(London, [1821年] 筆者所蔵)

